

2025年度 主要私立大志願状況（2月21日現在集計）

河合塾

2025/02/25

私立大一般選抜では1期（2月）入試が終盤を迎え、2期（3月）入試の出願がスタートしている。ここでは主要大の1期（2月）入試の志願者集計（2月21日現在）から、今春入試を分析する。

私立大入試の全体概況

志願者数は増加、安心材料求め出願校数を増やす動きがみられたか

＜図表1＞は、現時点で志願者数が判明した全国97大学の一般選抜の状況をまとめたものである。今春の志願者数は前年比107%となった。2025年度の18歳人口は前年比103%と増加に転じているが、それ以上に高い増加率となった。難関大・有名大では一般選抜の出願を手厚くする受験生が多かったものとみる。一方で、近年の入試の競争緩和の様相から、その他の大学では難関大・有名大ほど出願校数を増やす動きはみられないと想定され、私立大全体の志願者数の前年比は現時点よりダウンするものと見込んでいる。

方式別にみると、一般方式の志願者数は前年比104%、共通テスト方式では同113%と共通テスト方式で増加率の高さが目立った。今春、共通テストの受験者数は増加したものの、私立大専願者と思われる3科目以下の受験者は減少した。共通テスト方式の志願者増の中心は国公立大併願者によるものとみる。なお、私立大の共通テスト方式には出願締切日が共通テスト本試験前の「事前出願」の方式と、本試験後の「事後出願」の方式があるが、今春入試はとくに「事後出願」の方式で志願者の増加率が高くなった。

＜図表1＞私立大入試の実施状況

学校区分	一般方式			共通テスト方式			合計		
	24年度	25年度	前年比	24年度	25年度	前年比	24年度	25年度	前年比
全体（主要97大学計）	1,522,209	1,587,467	104%	800,199	905,111	113%	2,322,408	2,492,578	107%

※数値は2/21現在、出願期間中の方式および志願者数未公表の方式は集計対象外

系統別－「法」「経済」など社会科学が人気

＜図表2＞は学部系統別の志願動向である。赤の棒グラフが私立大全体の志願者前年比、棒グラフの濃い青色は学部系統を、その右側の薄い青色は各系統内の分野を表している。

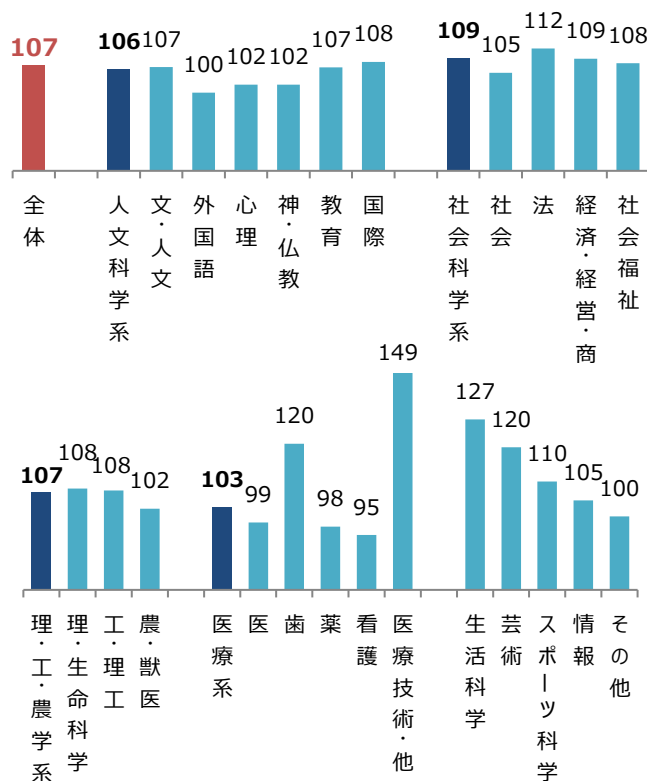
私立大全体の志願者数前年比107%を基準にみていくと、文系では「社会科学系」の志願者数が同109%と高い増加率になった。なかでも「法」分野は1割以上志願者が増加した。立教大（法）では2年連続で大幅な志願者増が続いている。青山学院大（法）や学習院大（法）、法政大（法）なども前年に続き増加しており、高い人気を示している。「人文科学系」も人気となっている分野があるが、「外国語」「心理」分野などでは志願者が前年並みにとどまっている。

「理・工・農学系」に目を向けると、「理・生命科学」や「工・理工」の志願者数は前年比108%となった一方、「農・獣医」分野は前年比102%と増加幅は控えめとなった。「農・獣医」では龍谷大（農）や摂南大（農）などで志願者が大きく減少した。

「医療系」では、「医」で志願者が前年比99%と、近年続いていた人気に落ち着きがみられた。現在志願者数が判明している大学の半数以上で志願者が減少した。このほか、「薬」「看護」も志願者は減少しており、今春は「医療系」全体の人気やや低調である。

そのほか、「生活科学」の志願者数が前年比127%と大きく増加した。これは系統全体の人気というより、実践女子大（生活科学など）の大幅な志願者増が要因であり、同大を除いて集計すると志願者数は微増にとどまる。また、今春も学部・学科の新設が相次ぐ「情報」の志願者数は現時点で前年比105%となった。

＜図表2＞私立大 学部系統別の志願動向（前年比）



※数値は志願者前年比 (%)

※数値は2/21現在、出願期間中の方式および志願者数未公表の方式は集計対象外

大学グループ別－難関大・有名大で高い人気、志願者増が続く大学も

＜図表3＞は主要私立大のグループ別志願動向である。冒頭でもお伝えしたが、今春は難関大・有名大を手厚く出願する受験生が増えたと見込んでおり、グループ大の志願動向をみても、概ね高い増加率を示す。

「早慶上理」の志願者数は前年比106%となった。方式別でみると一般方式で志願者減、共通テスト方式で志願者増となったが、これは早稲田大で今春より共通テストの利用を必須化した学部が拡大した影響によるものである。また、上智大を除く3大学で志願者数は増加した。

「MARCH」の志願者数は前年比107%となっており、とくに共通テスト方式で増加した。5大学すべてで志願者増となっており、このうち中央大と立教大は1割以上の増加となった。なお、明治大と法政大は今春も志願者数は10万人を超えた。

「成成明國武」の志願者数は前年比112%となった。前年度入試で志願者が微減となった明治学院大で3割以上増加、一般方式に英語資格・検定試験を活用する方式を設置した國學院大では2割増となった。一方、成城大では前年比90%と5大学の中で唯一志願者が減少した。

「日東駒専」の志願者数は前年比113%となった。このうち増加が目立ったのは日本大と東洋大である。両大学では前年度入試で日本大では志願者減、東洋大では志願者増と状況が異なるが、今春は両大学とも2割前後志願者が増加した。なお、東洋大では一般方式で、日本大では共通テスト方式で志願者の増加が目立つ。

「首都圏理系大学」の志願者数は前年比112%とこちらも大きく増加した。多くの大学で志願者が増加、なかでも東京工科大では現時点で前年比196%と大幅に増加した。とくに共通テスト方式で志願者の増加が目立つが、これは今春より同方式で併願受験料が無料になったことによる影響が大きい。

近年志願者の減少が続く「首都圏女子大学」の志願者数は前年比105%と増加に転じたが、これは先述の実践女子大での志願者増が要因である。同大の志願者数は前年の3倍以上にまで増加した一方、同大を除く8大学で集計すると志願者はむしろ減少しており、首都圏の女子大不人気の様相に変化はない。実践女子大増加の理由はさきほどの東京工科大と同様、今春より同一日程試験日の併願受験料が無料になったことが大きく影響している。

上記以外をグルーピングした「首都圏その他大学」の志願者数は前年比100%と前年並みにとどまった。大きく減少した大学はみられないものの、志願者増加の動きは控えめである。

＜図表3＞ 私立大 大学グループ別の志願動向

学校区分		一般方式			共通テスト方式			合計		
		24年度	25年度	前年比	24年度	25年度	前年比	24年度	25年度	前年比
首都圏	早慶上理	149,782	145,243	97%	57,828	75,650	131%	207,610	220,893	106%
	MARCH	255,256	268,984	105%	124,212	136,402	110%	379,468	405,386	107%
	成成明國武	65,769	72,761	111%	30,512	34,809	114%	96,281	107,570	112%
	日東駒専	149,019	171,946	115%	85,269	91,961	108%	234,288	263,907	113%
	首都圏理系大学	150,109	154,079	103%	134,117	164,452	123%	284,226	318,531	112%
	首都圏女子大学	27,722	28,314	102%	17,007	18,702	110%	44,729	47,016	105%
	首都圏その他大学	140,487	139,539	99%	86,474	87,781	102%	226,961	227,320	100%
近畿圏	関関同立	180,373	188,211	104%	80,404	85,661	107%	260,777	273,872	105%
	産近甲龍	167,873	176,453	105%	68,487	80,242	117%	236,360	256,695	109%
	近畿圏その他大学	57,044	55,905	98%	16,177	15,584	96%	73,221	71,489	98%

※数値は2/21現在、出願期間中の方式および志願者数未公表の方式は集計対象外
(大学グループ)
早慶上理：早稲田・慶應義塾・上智・東京理科大学
MARCH：明治・青山学院・立教・中央・法政
成成明國武：成蹊・成城・明治学院・國學院・武蔵
日東駒専：日本・東洋・駒澤・専修
首都圏理系大学：千葉工業・北里・工学院・芝浦工業・東京電機・東京都市・東京農業
首都圏女子大学：大妻女子・学習院女子・共立女子・実践女子・昭和女子・津田塾・東京家政・東京女子・日本女子
関関同立：関西・関西学院・同志社・立命館
産近甲龍：京都産業・近畿・甲南・龍谷

近畿圏の状況を見ると、「関関同立」の志願者数は前年比105%となった。すべての大学で志願者は増加しており、なかでも前年に4大学で唯一志願者の減少した関西大では、1割ほど志願者が増加した。関西大は前年度入試の反動に加え、新設学部の影響が大きかったものとみる。「産近甲龍」の志願者数は前年比109%と増加した。個別の大学をみると甲南大の志願者が4割以上もの増加となった。法学部や経済学部といった文系学部を中心に志願者が増加しており、人気の高まりを感じる。「近畿圏その他大学」の志願者数は前年比98%と減少した。首都圏同様、手厚く出願する様子はみられなかっただけでなく、なかには大学全体で志願者が3割ほど減少した大学もみられた。

個別大学の状況

次頁以降は主要大学のうち「早慶上理」「MARCH」「関関同立」の計13大学の志願動向（2月21日までの判明分）を確認する。＜図表4＞以降は各大学の学部別の志願動向である。あわせてご確認いただきたい。なお、河合塾の入試情報サイト「Kei-Net」では最新の私立大の志願状況を掲載している。下記URLからご覧いただけるので、そちらもぜひご利用いただきたい。

▼Kei-Net | 大学入試情報 | これからの入試
<https://www.keinet.ne.jp/exam/future/>

主要私立大の志願状況

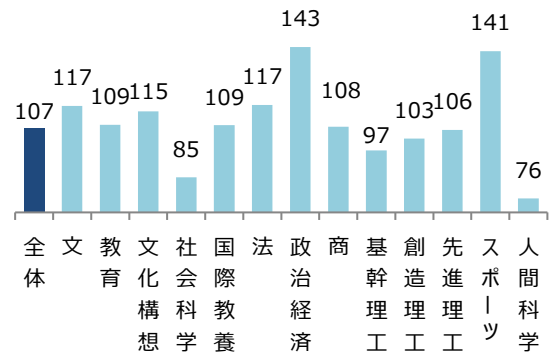
早慶上理の志願状況

①早稲田大

大学全体の志願者数は95,938人（前年比107%）と大きく増加した。今春、早稲田大は入試変更が盛んで、なかには共通テストを必須化する学部もあった。変更をマイナスに捉える動きは小さく、高い人気となった。

特徴のある学部の状況をみると、政治経済学部（前年比143%）、スポーツ科学部（同141%）と大きく増加した。両学部とも共通テストが必須となった2021年度以降、最大の志願者数となった。メイン入試である「一般選抜」の募集人員を減らし、「英語4技能テスト利用方式」を増員した文学部（前年比117%）、文化構想学部（同115%）も志願者が集まった。とくに文学部の「一般選抜」は募集人員が340→260名と大きく減員したにもかかわらず、前年比109%と前年に続き志願者増となった。ほとんどの学部が志願者増となった一方、人間科学部（前年比76%）、社会科学部（同84%）、基幹理工学部（同97%）の3学部は志願者減となった。人間科学、社会科学の2学部は今春より共通テストが必須になったことが要因。基幹理工学部は前年度入試で、3理工学部の中で唯一志願者が減少しており、志願者の増加が予想されていた。今春より募集する学系を再編したことが影響したものとみる。

＜図表4-①＞早稲田大 学部別志願動向（前年比）



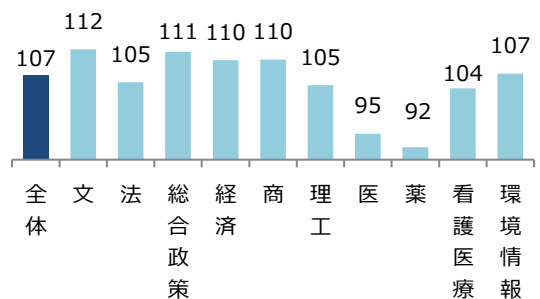
※数値は志願者前年比 (%)

②慶應義塾大

大学全体の志願者数は40,132人（前年比107%）と大きく増加した。学部別にみても、医学部、薬学部を除き志願者が増加した。志願者減がしばらく続いていたSFCにある総合政策、環境情報の2学部も今春は増加に転じており、同大の人気の高さがうかがえる。このうち、理工学部（前年比105%）では4年連続の志願者増となっており、人気が続いている。志願者の増加率の高さをみると、文学部（前年比112%）が目立つ。文学部は今春入試より、英語資格・検定試験を利用すれば大学の外国語試験の受験が不要となるため、志願者の増加につながったかもしれない。

一方、志願者が減少した学部をみると、医学部（前年比95%）では前年まで3年連続で志願者が増加していたこと、第1次試験日が例年より1週間以上早まったことで他大との併願スケジュールが立てづらくなったことなどが要因とみる。薬学部（前年比92%）では今春入試より理系数学（数学ⅢC）まで求められるようになり、敬遠されたものとみる。

＜図表4-②＞慶應義塾大 学部別志願動向（前年比）



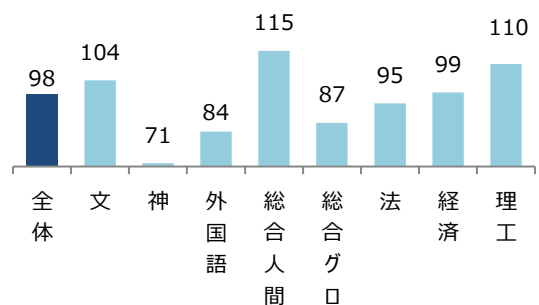
※数値は志願者前年比 (%)

③上智大

大学全体の志願者数は29,096人（前年比98%）と「早慶上理」グループの中では唯一志願者が減少した。方式別にみると、共通テスト方式で志願者が減少しており、とりわけ共通テストのみの方式（3教科型・4教科型）で減少が目立った。同方式は前年度入試で志願者が多く集まっており、警戒されたものとみる。一方で、一般方式（TEAPスコア利用入試）は志願者増となった。

学部別にみると、外国語学部（前年比84%）や総合グローバル学部（同87%）で志願者の減少が目立った。一方で、総合人間科学部（前年比115%）、理工学部（同110%）、文学部（同104%）の3学部は志願者が増加した。とくに文学部は前年度入試も志願者が増加しており、人気が続いている。

＜図表4-③＞上智大 学部別志願動向（前年比）



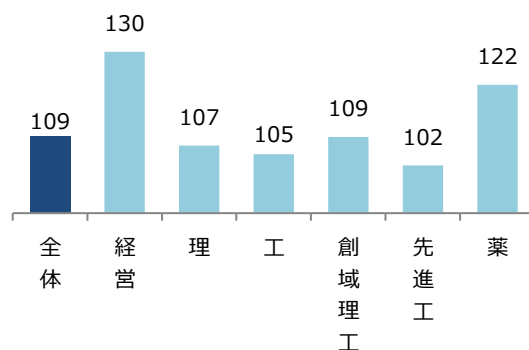
※数値は志願者前年比 (%)

④東京理科大

理学部（第二部）を除く大学全体の志願者数は、55,727人（前年比109%）と大きく増加した。方式別では、共通テスト方式で前年比115%と増加率の高さが目立った。なお、共通テスト方式には今春から一部の学部で国語が必須ではなく情報との選択となったA方式と、共通テスト英語・国語の2教科で事後出願できるC方式（併用方式）があるが、両方式とも志願者は増加、動向に差はみられなかった。

学部別の動向をみると、全学部で志願者が増加した。前年唯一志願者が減少した経営学部は前年比130%と大きく増加した。全学科理系数学（数学ⅢC）が必須となるグローバル方式でも志願者数は増えており、文系生だけでなく理系生も今春は比較的多く集まったものとみる。次いで薬学部の志願者数が前年比122%と増加、薬学系の全国動向と異なり人気となった。薬学部は今春より現在の野田キャンパス（千葉県野田市）から葛飾キャンパス（東京都葛飾区）へ移転する。薬学系志願者を集めた一因とみられる。理工系では前年度入試で志願者の増加が目立った先進工学部が前年比102%とやや控えめとなった。

<図表4-④> 東京理科大 学部別志願動向（前年比）



※数値は志願者前年比 (%)
※2/21判明分で、理学部（第二部）の数値は除いて集計

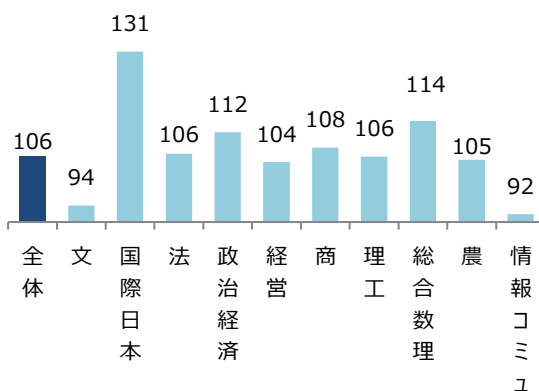
MARCHの志願状況

①明治大

出願締切前の共通テスト後期を除く大学全体の志願者数は、114,821人（前年比106%）と大きく増加した。方式別では、一般方式で前年比103%、共通テスト方式で同112%と共通テスト方式で志願者の増加が目立った。

学部別にみると、国際日本学部の志願者数が前年比131%と大きく増加した。今春より共通テスト併用方式（3科目方式、英語4技能試験活用方式）が新設されており、志願者数は両方式あわせて1,216人となった。文系ではこのほか政治経済学部（前年比112%）も志願者の増加が目立つ。国公立大併願者が多数を占める共通テスト方式（前期7科目）でも志願者は大きく増加しており、厳しい入試となった。理系に目を向けると、今春より理工学部、総合数理学部の共通テスト方式では「国語」の範囲が選択ではなく全範囲となった。敬遠要素になりそうな入試変更であったが、共通テスト方式の志願者数は両学部とも減少には至らなかった。総合数理学部ではメイン入試である「学部別入試」で志願者が増加した。志願者が増加した学部が多くみられる一方、文学部、情報コミュニケーション学部の2学部では志願者が減少した。

<図表5-①> 明治大 学部別志願動向（前年比）



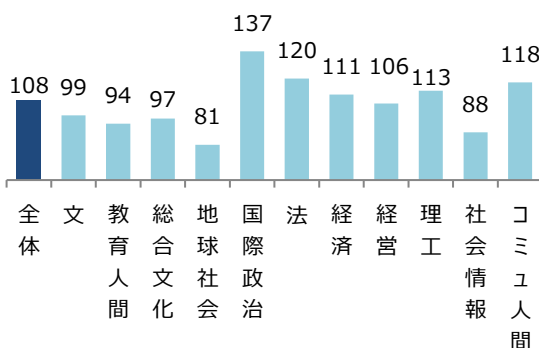
※数値は志願者前年比 (%)
※2/21判明分で、共通テスト後期の数値は除いて比較

②青山学院大

大学全体の志願者数は50,672人（前年比108%）と志願者が大きく増加した。方式別にみると、一般方式が前年比112%、共通テスト方式で同103%となり、全国の動向とは異なる動きとなった。共通テスト方式では今春、文学部、教育人間科学部、国際政治経済学部で新方式（科目型）を設置したものの、文学部と教育人間科学部の共通テスト方式はむしろ減少した。他の方式や学部に移れたものとみる。

学部別にみると、国際政治経済学部（前年比137%）や法学部（同120%）などで志願者の増加率の高さが目立つ。国際政治経済学部は新方式の導入や一般方式で英語資格・検定試験の活用方法の変更が志願者増の追い風となった。法学部は前年度入試も2割以上志願者が増加しており、高い人気が続いている。一方で、前年度入試で志願者が大きく増加した地球社会共生学部は前年比81%と大きく減少した。共通テストのみの方式に至っては志願者数は前年の半数以下となった。

<図表5-②> 青山学院大 学部別志願動向（前年比）



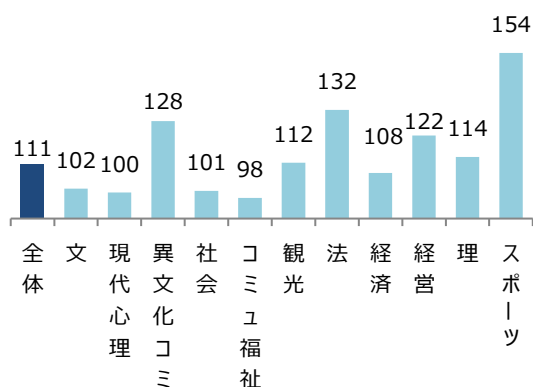
※数値は志願者前年比 (%)

③立教大

大学全体の志願者数は62,829人（前年比111%）と4年ぶりの志願者増となった。立教大は今年、2024年度一般方式の得点情報を公開した。その中には「英語」の得点状況も含まれており、合格者の英語資格・検定試験の最低スコア（CEFR）や共通テスト「英語」の合格最低点などが明らかとなった。志願者の中には、これにより出願に踏み切った受験生もいたと推測する。方式別にみると、一般方式が前年比112%、共通テスト方式で同110%となった。

学部別にみると、コミュニティ福祉学部を除き志願者は軒並み増加した。なかでも設置3年目のスポーツウエルネス学部で前年比154%と大幅に志願者が増加した。このほか法学部や異文化コミュニケーション学部も志願者の増加が目立つ。一方で、唯一志願者減となったコミュニティ福祉学部は前年比98%となった。同学部にあったスポーツウエルネス学科が学部昇格して以降、志願者は減少が続いている。

<図表5-③> 立教大 学部別志願動向（前年比）



※数値は志願者前年比 (%)

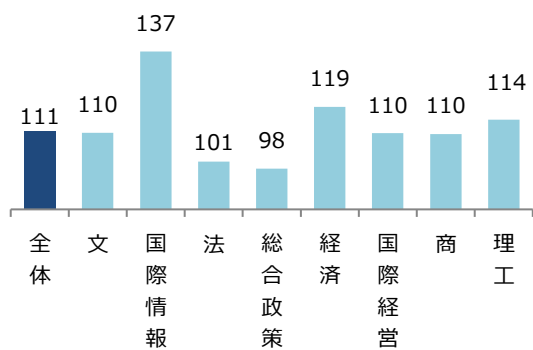
④中央大

出願締切前の共通テスト後期を除く大学全体の志願者数は71,957人（前年比111%）と大きく増加した。前年度入試で志願者が減少したことによる反動とみる。方式別にみると、一般方式の志願者数が前年比108%、共通テスト方式で同115%となった。一般方式はこれまで「6学部共通選抜」を実施していたが、今春より国際経営学部が同方式を廃止し、名称も「5学部共通選抜」となった。一般方式の中でも同方式の志願者数は5学部全体で前年比102%と増加率は小幅となった。

学部別にみると、国際情報学部（前年比137%）、経済学部（同119%）などで志願者が大きく増加した。国際情報学部では共通テスト方式で志願者の増加率の高さが目立つ。入試科目をみると、前年と比べ選択科目を増やすなどして科目の自由度が高まっている。受験のしやすさから志願者が増加したものとする。

増加した学部が目立つ一方、総合政策学部（前年比98%）では志願者が減少、また全国的に人気系統である法学部（同101%）は前年並みにとどまった。

<図表5-④> 中央大 学部別志願動向（前年比）



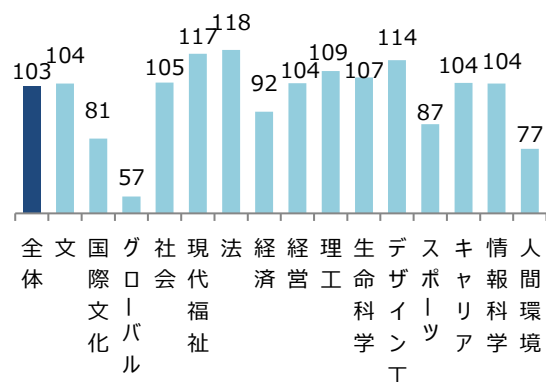
※数値は志願者前年比 (%)
※2/21判明分で、共通テスト後期の数値は除いて比較

⑤法政大

大学全体の志願者数は105,107人（前年比103%）と増加した。方式別にみると、一般方式が前年比100%、共通テスト方式で同109%となった。

学部別にみると、グローバル教養学部が前年比57%と大きく減少した。同学部は前年度入試で合格者数を絞り込んだことで倍率がアップ、警戒されたものとみる。とくにB方式（共通テスト方式）では実質倍率が23年度から24年度にかけて2.1→32.7倍と極端に難化しており、今春のB方式の志願者数は前年比32%となった。このほか、同様に前年度入試で倍率がアップした人間環境学部（前年比77%）や国際文化学部（同81%）も志願者が減少した。一方で、法学部（前年比118%）や現代福祉学部（同117%）などは志願者が増加、デザイン工学部（同114%）や理工学部（同109%）といった理工系学部も高い人気を示した。

<図表5-⑤> 法政大 学部別志願動向（前年比）



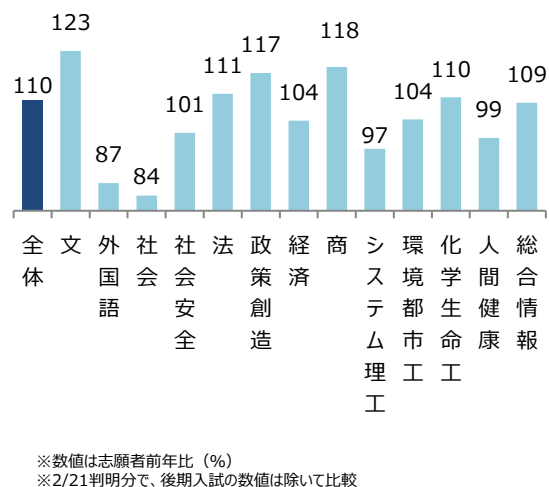
※数値は志願者前年比 (%)

関関同立の志願状況

① 関西大

出願締切前の後期入試を除く大学全体の志願者数は78,183人（前年比110%）と近年続いていた志願者の減少から一転、増加した。前年度入試の反動に加え、ビジネスデータサイエンス学部新設の影響が大きい。方式別でみると、一般方式で前年比105%、共通テスト方式は同121%となった。学部別にみると、文学部（前年比123%）、商学部（同118%）、政策創造学部（同117%）などで志願者が大きく増加した。このうち政策創造学部は前年度入試でも志願者が増加しており人気が続いている。また、総合情報学部の志願者数は前年比109%と増加した。ビジネスデータサイエンス学部ができたことで志願者の流出も考えられたが、その影響はみられなかった。一方、社会学部（前年比84%）、外国語学部（同87%）、システム理工学部（同97%）、人間健康学部（同99%）の4学部は志願者が減少、このうちシステム理工学部と人間健康学部では前年度入試でも志願者が減少している。

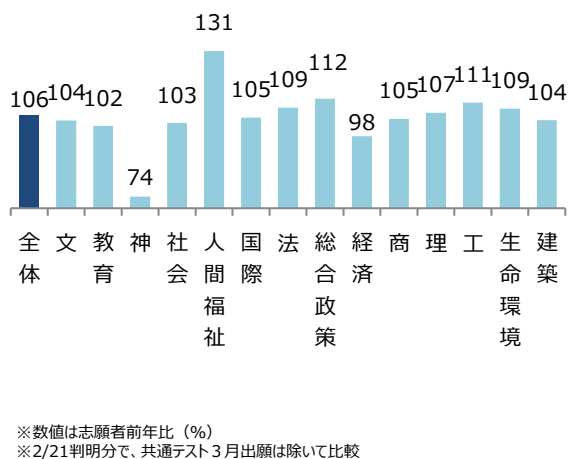
<図表6-①> 関西大 学部別志願動向（前年比）



② 関西学院大

出願締切前の共通テスト3月出願を除く大学全体の志願者数は、大学全体で54,227人（前年比106%）と志願者の増加が続く。方式別でみると、一般方式では前年比107%、共通テスト方式では同104%となった。同大では今春入試より共通テスト方式1月出願に8科目型を新設した。国公立大併願者の受験を見込んだものとみられるが、既存の7科目型も存在していることから志願者が分散したとみる。一方で今春の一般方式は地方試験会場を拡大。静岡（浜松）や三重（津）で新規実施したほか、京都会場では試験日を延長しており、受験のしやすさが志願者増につながったものとみる。学部別にみると、人間福祉学部の志願者数が前年比131%と増加が目立つ。先述の8科目型方式に加え、一般方式、共通テスト方式とも今春入試より方式の新設や変更などをしており、その効果が出たとみる。このほか、総合政策学部（前年比112%）、工学部（同111%）、法学部（同109%）、生命環境学部（同109%）などでも志願者の増加が目立った。

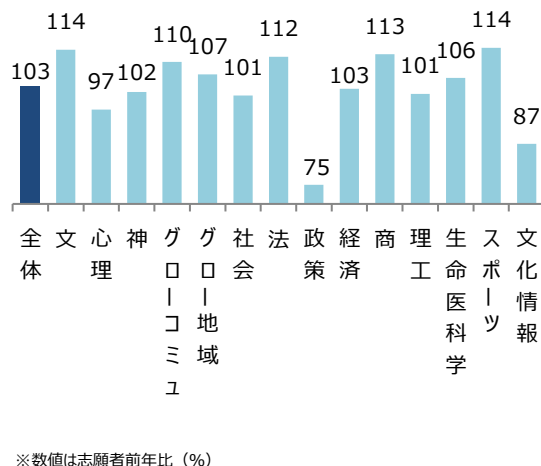
<図表6-②> 関西学院大 学部別志願動向（前年比）



③ 同志社大

大学全体の志願者数は52,729人（前年比103%）となった。方式別でみると、一般方式（前年比105%）で増加、共通テスト方式（同98%）で減少となった。学部別では、心理学部、政策学部、文化情報学部を除く全学部で志願者が増加した。今春入試より共通テスト方式を新規実施したグローバルコミュニケーション学部では志願者数が前年比110%と増加した。ただし、共通テスト方式の志願者数は99人と他学部と比べてやや少ない状況である。このほか、志願者の増加が目立つのは文学部（前年比114%）、スポーツ健康科学部（同114%）などである。一方、志願者減となった学部をみると、政策学部（前年比75%）は前年度入試で志願者が大きく増加、加えて一般方式については合格者は減少しており、難化を警戒した受験生が避けたものとみる。なお、志願者減となった3学部のうち心理学部と文化情報学部では、一般方式で文系・理系の2方式で選抜が行われる方式があるが、どちらも志願者は減少しており、差はみられなかった。

<図表6-③> 同志社大 学部別志願動向（前年比）

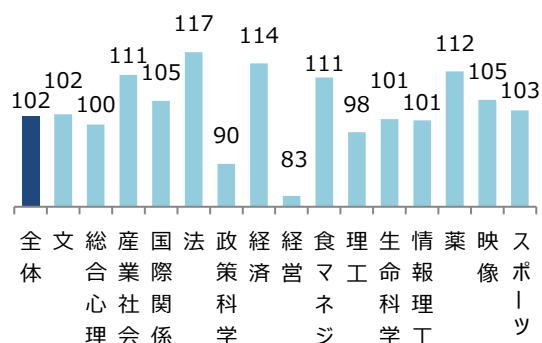


④立命館大

出願締切前の後期入試を除く大学全体の志願者数は88,733人（前年比102%）と「関関同立」グループのなかでは増加率は小幅にとどまった。一般方式、共通テスト方式ともに志願者数は前年比102%となった。共通テスト方式では今春入試より、併用方式において「情報活用型」を新設した。一部の学部が対象で、共通テスト「情報」と独自試験を組み合わせた入試であり、出願締切日も共通テスト後に設定されている。今春の共通テスト「情報」は平均点は約7割と高かったものの、志願者数が既存の併用方式を上回る学部はなかった。ただし学部により差が出ており、情報理工学部では既存の併用方式の志願者数が389人、情報活用型が362人と、情報活用型にも志願者が集まった一方、産業社会学部では既存方式の志願者数1,680人、情報活用型が185人と大きく開いた。

学部別にみると、全国動向と同様、法学部では志願者数が前年比117%と増加率の高さが目立った。前年度入試で志願者が減少しており、その反動によるものである。このほか経済学部（前年比114%）や薬学部（同112%）などで志願者が増加した。一方、政策科学部、経営学部、理工学部などでは志願者が減少した。理系学部は理工学部のみならず、生命科学部や情報理工学部といった学部も志願者数は前年並みにとどまっている。

<図表6-④> 立命館大 学部別志願動向（前年比）



※数値は志願者前年比 (%)
 ※2/21判明分で、後期入試の数値は除いて比較